

河本 圭司，本郷 一博，栗栖 薫●編

イラストレイテッド 脳腫瘍外科学

書評者

寺本 明（日本医科大学大学院医学研究科長／
（社）日本脳神経外科学会理事長）

● Science と Art が織りなす“脳腫瘍外科学”

東日本大震災直後の 2011 年 3 月 15 日、医学書院から、河本圭司・本郷一博・栗栖薫の 3 名の先生方の編集による『イラストレイテッド脳腫瘍外科学』が発刊された。わが国には「日本脳腫瘍の外科学会」という既に定着した学会があるので、この本の名称自体には違和感はなかったが、“脳腫瘍外科学”という名前の成書はこれまでなかったのではなかろうか？ そもそも脳腫瘍は、その治療過程において原則として何らかの手術を必要とする。そのため、主な脳腫瘍に関する手術書は数多く出版されてきた。また一方では、脳腫瘍のいわゆる解説書も少なからず入手することができる。

しかし、本書は、“脳腫瘍の手術は脳腫瘍を包括的に理解した上で取り組むべきである”，という編者らの強い思い入れによって制作されている。ちなみに筆者は、下垂体外科を専門とし

ているが、常々下垂体腫瘍を手術する医師は間脳下垂体内分泌学に精通していなければならないと考えている。すなわち、外科医的な発想だけで手術をすると、腫瘍全摘出イコール治療と考えがちである。下垂体腫瘍の治療体系において手術は確かに重要なステップではあるが、薬物療法や放射線療法、さらには術後のホルモン補償療法などを十分念頭に置いて治療しなければ、患者をトータルに治したことにはならないのである。同様に、脳腫瘍の手術では、単に手術のテクニックという側面だけでなく、術前・術中・術後管理や長期フォローを含めて総合的に脳腫瘍を理解していなければ優れた手術を実施することはできない。そのような編者らのコンセプトが本書を貫いていると思われる。

本書は、その前半を脳腫瘍手術の基本的事項が占め、後半を主要な脳腫瘍手術の包括的理解に当てている。前半については、基本とはいえ最新の知見

までが包含されている。後半は、一つの脳腫瘍に関して見開き、あるいはその 2 倍として簡潔な誌面構成を心掛けている。また、全体を通して図解を多くすることにより読者の理解を深めるための努力が随所にみられる点も特徴である。執筆者はそれぞれの分野で実際に多くの手術に従事しているエキスパートぞろいであり、編者らの意向をくんで、力のこもった記述がなされている。

本書を通して、多くの脳神経外科医が脳腫瘍の手術の基本やコツを学ぶとともに、その技術を取り巻く学術的背景を認識してくれることを期待したい。そして、真の脳腫瘍外科学とは、Science と Art が正に二重らせんのように織りなすところにあることを感じ取ってもらいたいと思う。

A4 頁 272 2011 年 医学書院刊
定価 16,800 円（本体 16,000 円＋税 5%）
[ISBN978-4-260-01104-4]

